

敦煌残卷王勃詩について

長谷部

剛

(一) 前言

「初唐四傑」の一人、王勃（字は子安。六五〇～六七六⁽¹⁾）の詩文集は『舊唐書』卷一九〇上「王勃伝」に「文集三十卷」とあるように、もとは三十卷あったことが知られる。しかし、この三十卷本は中国ではすでに散佚し、現存する『王勃集』は、例えば、四部叢刊に収められる『王子安集』、これは「明」崇禎十三（一六四〇）年に張燮が編んだテキストであるが、わずか十六卷、賦を十一首、詩を八十三首、表・啓・書・疏・序など文を百十一首収めるにすぎない。その後、『王子安集』に詳細な注を付した「清」蔣清翹『王子安集注』（光緒九（一八八三）年）においては、卷数こそ二十卷になるものの、張燮の『王子安集』に比べても、賦一首、詩十首（及び逸句二首）、文五首が多く収められているにすぎない。

敦煌文献 S. 5594 は、このように欠損した状態の王勃集をわずかながらも補うものである。本稿はこれについて報告するものである。

(1) 敦煌文獻 S. 555v

敦煌文獻 S. 555 は「李嶠雜詠注」が七首書写されている⁽²⁾。そして、この背面 (verso) には王勃をはじめとして東方虬・韋承慶・李行言・蘇晉・宋之問・蔡孚・鄭愿・鄭韞玉・樊鐔など、初唐から盛唐・中唐にかけての五言絶句・七言絶句・五言律詩、計三十七首が書写されている。これが敦煌文獻 S. 555v であり、書影は『英藏敦煌文獻 漢文佛經以外部分』第一巻で見ることができ⁽³⁾。

この S. 555v は『唐詩選集』残巻⁽⁴⁾、あるいは「唐人選唐詩」「唐詩叢鈔」とも称されるが、初唐・盛唐の詩人を中心とするものの、鄭愿・鄭韞玉など中唐期の作を含むことから、おそらく中晚唐期に書写されたものと推測され、唐詩研究において幾つかの重要な点を有する。例えば、

1. 韋承慶「南中望歸雁詩」(『全唐詩』卷四十六)は、『全唐詩』卷八十に于季子「南行別弟」として重出し、さらにそこでは「一作楊師道詩」とあり、同一の詩に三人の作者が擬せられていたが、この S. 555v に「南中望歸雁韋承慶」とあることから、現存する最古の書写資料において、この詩は韋承慶の作として流伝していたことがわかる⁽⁵⁾。

2. 劉允濟「見道邊死人」は『全唐詩』卷六十三に「一本別作劉元濟詩」とあるが、これも S. 555v に「詠道邊死人 劉允濟」とあることから、早期の流伝においてはやはり劉允濟の作とされていたことがわかる。

3. 『全唐詩』卷四十五に李福業の作として収められる「嶺外守歲」は、『全唐詩』卷四七五にも李德裕の作として

重出する。S.555vに「守威 李福業」として同一の詩（冬逐更籌盡……）が見られることから、やはりこの詩は中晩唐期の李德裕の作ではなく、初唐期の李福業の作だと確認できる。

4. 樊鑄の詩は『全唐詩』には一首も著録されていないが、敦煌文献においてはS.555vだけでなくP.3480にも見られることから彼の作品は唐代に広く流伝したと推測できる。

S.555vは『王勃集』と以下の二点で関わりを持つ。

①「九日至江州問王使君 蔡孚」

②「幽居 王勃」および「□中□臥像」

まず①について。以下にS.555vの当該箇所掲げる。

九日至江州問王使君 蔡孚 九日潯陽縣 門門有菊花 不□今送酒 若箇是陶家

これと、蔣清翊『王子安集注』卷三に収められる王勃の五言絶句と比較してみる。

九日 王勃

九日重陽節

開門有菊花

不知來送酒

若箇是陶家

九日 重陽の節

門を開けば 菊花 有り

知らず 酒を送り来たりて

箇かくの若きが 是れ 陶家なるかを

「兩首の五絶は極めて似ており、もとは同一の詩であったと考えられる。蔡孚は開元元年（七二三）、沈佺期らとともに「享龍池樂章」を製作しているから、王勃より後の時代の人物である。王勃「九日」が収められる最も古い資料は、「南宋」洪邁『万首唐人絶句』であるから、もとは蔡孚の詩が伝写の過程で文字の異同を伴いつつ王勃の詩と誤認されたものと判断される。ではなぜ王勃の詩と誤認されたのか。黄永武「敦煌斯五五五号背面三十七首唐詩的価値」⁽⁷⁾は、蔡孚の詩が「王使君」に贈られた詩であること、王勃の最も著名な作品である「滕王閣」詩、およびその詩序「秋日登洪府滕王閣餞別序」が九日（重陽節）での作であること、を指摘する。おそらくこの二点からの連想であろう。

蔡孚「九日至江州問王使君」が存在する以上、「九日（九日重陽節……）」は王勃集から除外されることになる。そしてまた、王勃の作と擬託された「九日（九日重陽節……）」から、蔡孚の詩の転句「不□今送酒」の欠字□は「知」が入るものと推定できる。⁽⁸⁾

(三) 王勃の逸詩二首

続けて②。この二首こそ、現行の王勃集に見られない王勃の逸詩である。王重民『補全唐詩』(一九六三年)⁽⁹⁾に翻字されたものを以下に掲げる。

幽居

澗戸風前竹、山空月下琴。唯餘兩□□、□盡百年心。

□中□臥像

淨宇流金□、眞誠翳寶床。自應□寂滅、非是倦津梁。

王重民『補全唐詩』の四十三年後、張錫厚『主編』『全敦煌詩』(二〇〇六年)⁽¹⁰⁾卷三十では以下のようになっている。

幽居

澗戸風前竹。山空月下琴。唯餘兩□□。應盡百年心。

寺中觀臥像

淨宇流金□。眞儀翳寶床。自應歸寂滅。非是倦津梁。

四十三年の間に様々な角度から判読が試みられた。「幽居」詩については、結句第一字の欠字が「應」と判読され

ている。「中□臥像」詩については、詩題が「寺中觀臥像」と判読され、⁽¹⁾承句の第二字「誠」が「儀」に改められ、
 転句第三字の欠字が「歸」と判読されている。

のこるは、「幽居」詩の転句「唯餘兩□□」第四・五字と「寺中觀臥像」詩の起句「淨字流金□」第五字の欠字
 である。後者については、「梵」・「棺」・「地」など諸家が様々な補充を試みているが、⁽¹²⁾前者について諸家の言及はな
 い。次節以降、前者「幽居」詩に焦点を絞り、欠字を埋める作業を通じてこの詩の改題と解釈を試みたい。

(四) 王勃「閑居」詩

転句の欠字を埋める前に、承句の「山空」について、項楚「補全唐詩」二種⁽¹³⁾の指摘が重要と判断されるの
 で、以下に引用する。

王勃《幽居》

澗戸風前竹、山空月下琴。

「澗戸」與「山空」不對、疑「空」字爲「窗」字之誤。《全唐詩》卷四一盧照鄰《驕臥山中》
 「澗戸無人跡、山窗聽鳥聲」。正以「澗戸」與「山窗」爲對。

項楚氏は、「澗戸」と「山空」では対にならないことから、「山空」は「山窗」の誤りであることを、王勃と同じ
 「初唐四傑」の一人である盧照鄰の詩を傍証として指摘する。今これに従う。

では、転句「唯餘兩□□」の第四・五字には何が入るのだろうか。本詩が起句と承句が対句を構成していることは、

すでに項楚氏によって指摘されている。本稿ではさらに、転句と結句もまた対句を構成していると推測されることを強調したい。第一・二字が「唯餘」↓「應盡」と、虚字＋動詞であり、第三字が「兩」↓「百」と、数詞である。このように転句と結句が対句を構成していると判断されるならば、第三～五字は「兩」↓「百」心」と、数詞＋名詞＋名詞となる。従って、「兩」↓「百」心」は「数詞＋名詞＋名詞」の構造をとるものと考えられる。

続けて「兩」↓「百」心」について考察するために、これと対になる「百年心」が何を意味し、どのような表現上の効果をあげているのか、考えてみたい。管見の限りで王勃以前に「百年心」の用例を見いだすことはできないので、現段階では「百年心」なる語は王勃に始まる、と判断される。では、王勃以後はどうか。

1. 王昌齡(六九〇?~七五六?) : 「少年行二首」其一 : 夜闌須盡飲、莫負百年心。
2. 張謂(?~七七八?) 「寄李侍御」 : 近看三歲字、遙見百年心。
3. 杜甫(七一二~七七〇) 「春日江村五首」其一 : 乾坤萬里眼、時序百年心。

右の1~3を見ると、「百年心」は「一生涯」「百年」を見通す心」と解釈できる。

(四) 王勃の入蜀体験

王勃詩には「百年身」という用例がある。

送送多窮路	送送として多く路を窮め
遑遑獨問津	遑遑として獨り津を問ふ
悲涼千里道	悲涼たり 千里の道
悽斷百年身	悽斷たり 百年の身
心事同漂泊	心事 同じく漂泊し
生涯共苦辛	生涯 共に苦辛す
無論去與住	論ずる無かれ 去ると住まると
俱是夢中人	俱に是れ夢中の人

この詩の題を蔣清翊の『王子安集注』は「別薛昇華」とするが、ここでは『文苑英華』巻が「秋日別薛昇華」と題するのに従う。張志烈『初唐四傑年譜』⁽¹⁴⁾は、この詩を總章二年（六六九）七月、王勃二十歳、蜀（四川省）の綿州での作と編年する。乾封元年（六六六）、王勃は幽素挙に応じ及第、朝散郎となり、さらに沛王李賢に召され侍読となるが、總章二年の春、戯れに作った「檄英王鷄文」のために高宗の怒りに触れ沛王府を出されることになる。そして同年五月長安を離れ蜀へ旅立ったのである。

王勃の入蜀は彼の詩文制作に決定的な影響を及ぼした。隋代の大儒、王通の孫として生まれ、六歳にして六経に通じ、十代で当時流行していた「上官体」に反対する文学運動を主張し、十七歳で「宸遊東岳頌」「乾元殿頌」を朝廷

に献じ、そしてその年に幽素琴に及第、沛王府に入る——早熟の天才として詩文の才を誇った王勃は、沛王府からの放逐によって初めて挫折を経験し、長安から離れて異郷の地、蜀へと向かう。

入蜀以降の王勃の詩文には、流寓の我が身を見つめる内省的な表現が多くなる。さらに、王勃は故郷を離れ異郷に赴くことによって生じた距離的・心理的隔絶、換言すれば「望郷の思い」を、詩的表現に昇華させている。前掲の「秋日別薛昇華」において、これらが——同じく宦遊を余儀なくされた薛昇華への同情と共感とともに——凝縮されていると言えよう。特に、「悲涼千里道、悽斷百年身」は、「悲涼」↓「悽斷」、「千」↓「百」、「里」↓「年」、「道」↓「身」と、「形容詞＋数詞＋量詞＋名詞」と対句を構成するなかに、前句で距離的・心理的隔絶（望郷の思い）を詠い、後句で流寓の自己を省みており、この特徴が最も顕著に表れている。「百年身」の「百年」とは実数ではなく、王勃が過去から現在を経て未来へと続く自己の生涯を、全体的に見通す状況に置かれてはじめて生まれた表現であると結論できよう。

「秋日別薛昇華」の翌年、咸亨元年（六七〇）の秋、成都での作である五律「重別薛華」にも同じモチーフが繰り返される。いま頸聯を掲げる。

旅泊成千里

旅泊して 千里を成し

棲遑共百年

棲遑して 百年を共にす

対句構造の中で「千里」と「百年」が対置され、前句で距離的・心理的隔絶を詠い、後句で流寓の身にある薛華と

自己の人生を省みている。

さらに煩を厭わず、同種のを以下に二首掲げる。

百年懷土望

百年 土望を懷き

千里倦遊情

千里 遊情に倦む（麻平晩行）首聯

別路餘千里

路を別ちて千里を餘し

深恩重百年

恩に深じて百年に重し（秋日別王長史）首聯

「麻平晩行」の「麻平」は地名。蜀・樂山の東に位置する。「秋日別王長史」は前掲の首聯のあとの領聯に「正悲西候日、更動北梁篇」とあり、詩制作の地を「西」、都長安を「北」と表現していることから、蜀での作を考えられる。両者とも入蜀時期の作品であろう。

（五）入蜀期の望郷表現

都長安を発ち蜀を旅した時期の作品には、当然のことながら、望郷の思いを詠う措辞が多い。

九月九日望郷臺

— 九月九日 郷を望む臺

他席他郷送客杯

—— 他席他郷 客を送る杯（蜀中九日）起句・承句

長江悲已滯

—— 長江 已に滯れるを悲しみ

萬里念將歸

—— 萬里 將に歸らんことを念ふ（山中）

早是他郷值早秋

—— 早に是れ 他郷にて早秋に値り

江亭明月帶江流

—— 江亭の明月 江流を帶ぶ（秋江送別二首）其一起句・承句

誰謂波瀾纒一水

—— 誰か謂ふ 波瀾 纒か一水のみと

已覺山川是兩郷

—— 已に覺ゆ 山川 是れ兩郷（秋江送別二首）其二転句・結句

右の「秋江送別二首」を張志烈『初唐四傑年譜』は編年しないが、内容、特に風景描写から見て、蜀滞在期の作品であろう。

望郷表現は右に掲げた詩のみに止まらない。以下に、賦を挙げる。

「慈竹賦并序」

廣漢山谷、有竹名慈。—— 廣漢の山谷、竹有り名は慈。

(省略)

勳鄉關之思者、

蓋撫高節而興感、

覽佳名而思歸。

遂爲賦曰、

嗟乎、道之存矣、

物亦有之。

(省略)

我蓬轉於岷徼、

遂萍流於江汜。

分兄弟於兩鄉、

隔晨昏於萬里。

(以下略)

(省略)

鄉關の思ひを動かす者、

蓋し高節を撫でて感を興し、

佳名を覽て歸らんことを思はん。

遂に賦を爲りて曰く、

嗟乎、道の存するや、

物も亦た之有り。

(省略)

我蓬のごとく岷徼に轉し、

遂に萍のごとく江汜に流る。

兄弟を兩郷に分かち、

晨昏を萬里に隔つ。

(以下略)

この「慈竹賦并序」は序に「廣漢」と明記されているように、廣漢（四川省廣漢）での作。張志烈『初唐四傑年譜』は、咸亨元年（六七〇）の秋に編年する。王勃二十一歳の作である。

王勃は廣漢から德陽に至り、しばらく滞在した後、成都へと到着する。成都での作が前節（四）で掲げた「重別薛

華」であるが、それに先立つ徳陽での作に「宇文徳陽宅秋夜山亭宴序」がある。この駢文の序に以下のような表現がある。

乃知兩郷投分、

乃ち知る 兩郷に分を投じ（意気投合し）、

林泉可攘袂而遊。

林泉に袂を攘ばたひて遊ぶべきを。

以上、列挙してきた王勃の望郷表現のなかで注目すべきは、「他郷」「兩郷」という語である。両者とも「異郷」と同義と考えられ、蜀という異郷の地に赴いた王勃の望郷表現のなかでも最も象徴的な語である。

ここで、想起するのは、S. 355「幽居」詩の「唯餘兩□□」である。「兩□□」は、王勃の詩文に多用される「兩郷」ではなからうか。もしそうだとすれば、「兩郷□□」の最後の欠字には何が入るのであるか。唐代詩人の用例を参考にすべく検索してみると、以下のような表現があった。

千里思 鄭錫

渭水通胡苑

渭水は胡苑に通じ

輪臺望漢關

輪臺より漢關を望む

帛書秋海斷

帛書 秋海に斷ち

錦字夜機閒

錦字 夜機に閑かなり

旅夢蟲催曉

旅夢 蟲 催して曉あめ

邊心雁帶還
邊心 雁 帶びて還る

惟餘兩鄉思
惟だ餘す 兩郷の思ひ

一夕度千山
一夕 千山を度る

これは、故地から千里遠く離れた異郷、すなわち「兩郷」での思いを詠った詩であり、令狐楚「御觀詩」⁽¹⁶⁾に採られている。鄭錫は寶應元年（762）の進士であるから、王勃より約百年後の人物である。「惟餘兩郷思」は、「ただだ、異郷での思いを持って余すばかりだ」と解釈できよう。鄭錫「千里思」は当時の選集に採られるほどであるから、詩壇から優れた詩、作詩の際に模範とすべき詩として認定された表現だと位置づけることができる。

このように考えると、S. 555の王勃「幽居」詩の第三句は「惟餘兩郷思」であったのであり、この措辞がのちに、作詩の際に模範とすべき表現として定着し、鄭錫もその影響を受けこの措辞を用いたのではないかと推測できよう。また、「兩郷思」であれば、第三句と対句を構成する第四句の「百年心」とも、「教詞十名詞十名詞」というかたちで対応することになる。

(五) 小結

以上の考察を経て復元・校勘した、敦煌残卷 (S. 555) 王勃「幽居」詩は、以下のようになる。

澗戸風前竹
一 澗戸 風前の竹

山窗月下琴

山窗 月下の琴

唯餘兩鄉思

唯だ餘す 兩郷の思ひ

應盡百年心

應に盡くすべし 百年の心

〔通釈〕谷間にあるこの家では、竹の葉が風にそよぎ、山を望む窓の下では、つまびく琴に月の光が注ぐ。故地を遙か遠く離れ、私は異郷での思いを持て余しており、このような時にこそ、わが生涯を見通すことに心を尽くさねばならぬ。

第一・二句の叙景は蜀の風景を彷彿とさせ、さらに、第三・四句は前句で距離的・心理的隔絶（望郷の思い）を詠い、後句で流寓の自己を省みており、王勃の入蜀期の作品の特徴と一致する。本詩は、王勃の入蜀期の作品と結論できよう。

〔注〕

(1) 王勃の伝記については不明な点が多く、生没年についても諸説紛々としている。いまここでは、植木久行「詩人たちの生と死——唐詩人伝叢考」(研文出版、二〇〇五年七月)による。

(2) 「李嶠雜詠注」は敦煌文献ではP.3788などにも見られる。詳しくは、徐俊「敦煌詩集殘卷輯考」(中華書局、二〇〇〇年六月)を参照。

(3) 中国社会科学院歴史研究所「ほか」合編、四川人民出版社、一九九〇年。

(4) 「唐詩選集」殘巻」と題するのは、『全敦煌詩』巻三十(張錫厚「主編」、作家出版社、二〇〇六年五月)。「唐人選唐詩」と題するのは、王重民「唐人選唐詩殘卷跋」(北京大学中国中古史研究中心「敦煌吐魯番文献研究論集」、中華書局、

- 一九八二年五月) および、「注」(3)所掲の『英藏敦煌文獻 漢文佛經以外部分』第二卷。「唐詩叢鈔」と題するのは、「注」(2)所掲の徐俊『敦煌詩集殘卷輯考』。
- (5) この章承慶「南中望歸雁詩」は、「日本」藤原公任『和漢朗詠集』にも採られる(三一七番)。
- (6) 『舊唐書』卷三十「音樂志・唐會要」卷二十二「龍池壇」。
- (7) 黄永武・施淑婷『敦煌的唐詩續編』所收、文史哲出版社、一九八九年八月。
- (8) 蔣礼鴻『補全唐詩』校記(『敦煌學論集』所収、甘肅人民出版社、一九八五年三月)は、「不□今送酒」の「不□」は「白衣」と推測する。「不」字を「白」と判読しているのである。しかし、S. 5525の書影から当該字が「白」とは判読しがたいこと、また、東方虬「春雪」(『全唐詩』卷一百)に「不知園裏樹、若箇是真梅」とあり傍証となることから、「不知」と考えるべきであろう。
- (9) 『全唐詩外編』所収、中華書局、一九八二年七月。初出は一九六三年。
- (10) 作家出版社、2006年5月。
- (11) ただし、「寺」字については、潘重規「補全唐詩新校」(『華岡文科學報』第十三期、一九八一年六月)は「龍」とし、黄永武「敦煌斯五五五号背面三十七首唐詩的価値」(注7)は「龜」とする。
- (12) 詳しくは、徐俊『敦煌詩集殘卷輯考』(中華書局、二〇〇〇年六月)を参照。
- (13) 『四川大学學報 哲學社会科学學報』一九八三年第三期。
- (14) 巴蜀書社、一九九三年四月。
- (15) 傅璇琮『唐人選唐詩新編』(陝西人民教育出版社、一九九六年七月)。なお、『全唐詩』卷二六二は第八句の「千」字を「關」に作る。

〔追記〕

本稿は、関西大学中国文学会第一回大会(二〇〇七年十二月一日、於関西大学)における口頭発表「敦煌殘卷王勃詩について」をもとに執筆したものである。発表では來臨の諸賢より貴重なご意見を賜った。特にここに記して謝意を表したい。